

アコースモニウムを用いた電子音響音楽の上演に関する研究

檜垣, 智也

<https://doi.org/10.15017/1543991>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 檜 垣 智 也

論 文 名 : アコースモニウムを用いた電子音響音楽の上演に関する研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、電子音響音楽のコンサートの際にしばしば使用される アコースモニウム(Acousmonium)による演奏形態を再定義することを目的とした研究である。アコースモニウムに関する研究は、発案者であるフランソワ・ベイル (François Bayle) の言説と実践、様々な装置と演奏方法の事例について個別に明らかにされているが、それらを総括した形での、アコースモニウムの全体像については、未だ結論が得られていない。またアコースモニウムは、ステレオ音源をマルチトラック分配する装置の総称であると広く信じられているが、それはこの装置の基本的な目的ではあるが、様々な目的の1つでしかなく、定義について再考の余地がある。そこで以下の3つを指針として挙げ、検証を行った。

- アコースモニウムの理念
- 様々な装置の特徴
- 装置の枠を越えた楽器

第2章においては、アコースモニウムの理念について論述した。そこでまず電子音響音楽の誕生に影響した当時の現代音楽界とアート界の動向とアコースモニウム以前の電子音響音楽の上演方法を確認した。次いで「聴感を演出する楽器」「内部空間と外部空間」「音のプロジェクターと音響スクリーン」「アコースマティック」「音のイメージ」といったベイルがアコースモニウムを説明する際に使用するワードと軸に検討した後、それらがベイルによって実現した最初のアコースモニウムへどのように反映されているのか図面と写真から分析し、その本質を解き明かした。そして電子音響音楽のコンサートにおける問題点が、ベイルのやり方によってどのように解決されたか検討した。最後に一般的なアコースモニウムの装置の内容と様々なアコースモニウム、あるいは類する装置についてまとめた。

第3章では、ベイルのアコースモニウム以後の4つのアコースモニウムを取り上げ、それぞれの目的と装置の内容の観点から論述した。具体的には機材構成、レイアウト図面、フェーダーとスピーカーの構成表などの一次資料を基に分析していった。「空間の拡張と作曲者の演奏技術とそのスタイルへの対応」を目的としたベイルが退職した後の GRM のもの、ベイルと GRM のアコースモニウムを融合し演奏技術の「ヴィルトオーズ化」と装置の「スタンダード化」を目指したフュチュラのもの、その他の目的を持った事例として、「マルチチャンネル作品」へ柔軟に対応する HYDRA ラウドスピーカーオーケストラ、小型化による「効率化」を実現したミュージサーカスのものを取り上げた。最後に、アコースモニウムと同じように音場を創出するサラウンド方式と比較した。5.1ch や 7.1ch などと呼ばれる標準化を目指すサラウンド方式に対し、アコースモニウムは目的と条件に合わせて、装置の構成を自在に変化させながら、柔軟な対応を可能にする装置であることがわかった。

第4章では、実際の操作、つまり演奏方法について論述した。まず一般的な音源再生から放射までのプロセスを比較した。次いで事前準備する「演奏用スコア」を作曲・演奏・聴取の関係に位置付け役割と意義を考察し、グラフィックベース、テキストベース、波形ベースによる3つの演奏用スコアの書き方とそれぞれの特徴を明らかにした。具体的な演奏方法として、プラグジュによる「聴きとりの構図」によって作品の「大きな形式」と音響構成を強調するアプローチと、ヴァンド=ゴルヌによる作品の「空間の型」を強調する2つの手法を概観した。具体的な演奏例として筆者の自作《豊饒の海》(2011)より第6楽章〈空と海〉の演奏用スコアを示し、その演奏方法について詳述した。最後に筆者自身による演奏の記録の試みを紹介した。音場の記録とその再生には高精度の音場の収録・再生を目指して開発された「境界面制御 (BoSC) システム」を、フェーダー操作の記録とその視覚化にはAvid社のPro Toolsを、それぞれ用いた。

これらに第5章での考察を加えた結果、以下のことが明らかになった。

まず、アコースモニウムの理念は次の2点から成る。

1. アコースモニウムは、特性の異なる複数の音響スクリーンの特性を利用し、上演空間内の聴感をリアルタイムに演出する。
2. アコースモニウムは、操作する姿を露わにすることで、巨大なツールの「楽器」としての側面を強調し、コンサートの祝祭性を取り戻す。

アコースモニウムは、音源再生機、ミキサー、スピーカーなどで構成される音響機器の総体であるが、装置として共通する特徴は次の3点である。

1. アコースモニウムは、上演の条件に合わせて、個別の装置の性格が決まっている。
2. アコースモニウムには、空間表現の拡張、演奏技術への対応、機動性が確保されている。
3. すでに性格の異なる様々な装置が提案され、総体として、アコースモニウムは豊かな世界を作り出している。

さらに、アコースモニウムが装置の枠を越えた楽器として認識されるのは以下の2点からである。

1. アコースモニウムの演奏は、演奏者自ら作成する「演奏スコア」と作品音源そのものによって作品を解釈した上で、演奏方法を決定していること。
2. アコースモニウムは、様々な解釈と演奏方法へ拓かれている「楽器」であるということ。

以上をさらに要約すると次のようになる。

アコースモニウムは、電子音響音楽をコンサートにおいて、上演空間全体を使用して聴感を演出し、それをリアルタイムな演奏行為により作品の上演に深く関与する。多彩で柔軟性に富んだ演奏ツールであり、作品の多様な解釈を演奏行為として実現できる楽器としての側面を持っている。

本研究によって、アコースモニウムによる演奏実践とは、現在まで様々な工夫を凝らし豊かな広がりをみせることで電子音響音楽の上演に大きく寄与していることがわかった。今後は研究の成果を踏まえ、アコースモニウムによって切り開かれた電子音響音楽の多様な演奏実践を継続する。